

# 当別文芸の会だよりNO,47

H26・2/26 発行 (連絡先・河地良一 TEL23-2103)

## 2月の読書会・文芸交流は村木一枝さんのお話でした

今冬も大雪を心配していましたが、2月も後半になり、陽ざしも春を予感させる日が続いています。2月22日(土)の例会には15名のメンバーのみなさんが参加されました。また、「石狩川を読む会」の森山千恵子さんが参加してくださり、計16名で和気あいあいのなかで交流することができました。

今回の読書会・文芸交流は、メンバーの村木一枝さんをお願いして「私のロシア体験」のテーマでお話をいただきました。また、司会進行は事務局長の堀江三千代さんに、全体進行に続けてそのまま担当していただきました。

村木さんは稚内市のお生まれで、稚内での生活からロシア語に関心を持たれ、東京の日ソ学院で学ばれ、ロシア留学も経験されています。現在、ロシア語の通訳として、日本人の極東ロシア訪問やロシアからの交流使節団などのお仕事で活躍されているほか、翻訳などの仕事もされているそうです。

村木さんのお話の内容は、ロシア留学時代に体験したロシア人の生活習慣、考え方など大変興味深いものばかりでした。ソ連からロシアに国家体制が変わりましたが、一般のロシア人は「アネクドート」という例え話、ジョークで体制批判までも笑い話にしてしまうなど、ユーモアを忘れない国民性も面白いと思いました。また、いろいろな国の留学生と一緒に生活した体験なども、これからの国際社会で生きていく私たちにとって、大変参考になる話でした。

続いて、ロシアの作家・チェーホフの短編集から「ワーニカ」の読後感想について交流しました。ロシアの民話や子どもの心、そして現実と理想など、読者を魅了するチェーホフの読書案内のような作品に触れるひと時でした。

話題提供をしていただきました村木一枝さんに、みなさんでもう一度大きな拍手を。

## 3月の例会ご案内

次回の読書会は3月15日(土)13:30より白樺コミセンです。指定図書は先にお渡ししてある佐川光晴の「おれのおばさん」(集英社文庫)です。

佐川光晴は、昭和40年(1965年)東京都生まれで、北大法学部を卒業。作家生活に入り、これまでに新潮社新人賞、野間文芸新人賞を受賞しています。本作品は平成23年(2011年)に坪田譲治文学賞を受賞し、少年の成長していく姿を描いています。お楽しみに。

\*次年度(平成26年度)の年間計画の予定をたてています。スタートは4月26日(土)からになります。新しいメンバーもお誘いください。

また、「当別文芸」(第4号)も編集中です。原稿、まだ間に合います。

# 当別文芸の会だよりNO,48

H26・3/22 発行 (連絡先・河地良一 TEL23-2103)

## 3月の読書会は佐川光晴の「おれのおばさん」でした

陽ざしも眩しく、春近しを思わせる3月15日(土)、白樺コミセンでの読書会には14名の同人(メンバー)が参加されました。

今回は佐川光晴の「おれのおばさん」(集英社文庫)についての読後感想交流で、司会進行は大澤勉さんに担当していただきました。

この文芸の会は「北海道ゆかりの作家、作品を通して、北海道の独自性や北海道らしさとは何かを、みんなで自由に語り合いませんか」という趣旨ですが、時には幅を広げて、若い作家や現代の世相を題材にした内容なども取り上げてみては、ということでこの作品が選ばれました。

作家の佐川光晴は、昭和40年(1965)東京都生まれで、北大法学部を卒業しています。作家活動では、これまで「新潮新人賞」や「野間文芸新人賞」などを受賞しており、この「おれのおばさん」は平成23年(2011)に「第26回坪田譲治文学賞」を受賞しています。

内容は、単身赴任をしている父が横領で逮捕され、名門中学校を退学して札幌で母の姉が運営している児童養護施設に入ることから、さまざまな人間関係の中で、登場人物それぞれが成長していく姿を描いた作品になっています。

みなさんの読後感想は、文章は平易で一気に読ませる作品だが、あまり感動するものはないというのが大方の感想でした。それは「青春小説という現代の若者感覚に対するジェネレーション・ギャップ」なのか、特に男性にはあまり受けなかったようです。女性の見方は「取り巻く人間関係の中で成長していく過程などは、もっと若い人に読んでほしい」といった感想などもありました。

子ども時代を振り返ると「親に反抗することも、大人に脱皮する成長過程だ」という体験話なども飛び出しました。

この文芸の会に参加することにより「自分の読書の偏食をなくする」といった感想があったことを思い出しながら、4年目の読書会を終わらせていただきます。みなさん、ありがとうございました。

## 平成26年度(5年次)総会・文芸交流・懇談会のご案内

- 日時 平成26年4月26日(土) ○ 会場 田西会館(弥生)
- 日程 総会・文芸交流(提言・竹原一孝さん) \*資料当日 11:00~12:10  
交流懇談会(幕の内弁当・コーヒー 会費1,500円 当日)  
12:20~13:30
- 参加申込み 4月20日まで 堀江あて(Tel.090-2054-7457)  
\*3月例会時に申込できなかった方、よろしくお願ひします

# 当別文芸の会だより NO.49

H26・4/28 発行（連絡先・河地良一 TEL23-2103）

## 当別文芸の会・5年目がスタート

春の雪解けが一気に進み、ポカポカ陽気の4月26日（土）11:00より、田西会館で平成26年度「当別文芸の会・総会」が開催されました。

新しい会員に大畑裕貴さん、森山千恵子さんを迎え、会員22名でスタートとなりましたが、当日は18名の皆さんに参加いただきました。

総会の議長は佐藤孝さんに務めていただき、平成25年度の活動内容、会計決算が、監査報告（久保義雄さん）のあと承認されました。特に前年度との変更では、文芸誌の決算も本会計に繰り入れて収支をおこなうようにしました。

続いて平成26年度の活動計画、会計予算案が承認されました。活動の主な内容は、「読書会」が月1回の年10回、「文学散歩」は7月26日（土）に伊達、室蘭方面の予定です。なお「文芸セミナー」は、他団体と共催、又は後援等で開催出来るか、今後、検討していくということでの提案となりました。

また、文芸誌「当別文芸」（第4号）は、現在、6月末の発行予定で編集を進めていますが、発行部数、実費頒布の単価など、これまでの需要冊数と比較しながら、次回の例会時にお知らせの予定です。

また、平成26年度の世話人は、代表、副代表、事務局長、会計、幹事（情報担当、研修担当）、監査の皆さん、それぞれ昨年に引き続き担当していただくということで承認されました。今年度も、よろしく願い申し上げます。

総会に引き続いて、文芸交流では竹原一孝さんに「吉村昭の横顔」のテーマで話題提供をしていただきました。東京都・日暮里図書館の「吉村昭コーナー」を訪れた内容の他、30年ほど前からの雑誌「文芸春秋」の図書コーナーを自宅に持ち、その中から吉村昭の記事や吉村自らの尊厳死のことなど、興味深い内容で、続きをまたいつか聞きたいという皆さんの感想でした。

総会、文芸交流のあと、昼食懇談となり、後半は参加された皆さんから、それぞれ自由な話題で情報提供をいただき、楽しいひとときをすごしました。

読書会もいろいろな感想があるから面白いというのが、この文芸の会の特徴でもあり、今年もまた、いろいろな作品に触れる機会、そして仲間との語りいで、お互いが触発される一年になることを願っております。

## 5月・6月 読書会の予定

次回は5月17日（土）13:30、白樺コミセンです。作品は室蘭出身・八木義徳の木田金次郎をテーマにした「漁夫画家」（資料）です。6月21日（土）13:30も白樺コミセンです。作品は宮尾登美子の「鬼龍院花子の生涯」（文春文庫617円）です。どちらも「文学散歩」の関連で作品が選ばれました。

# 当別文芸の会だより NO.50

H26・5/19 発行（連絡先・河地良一 Tel23-2103）

## 5月の読書会は八木義徳の「漁夫画家」でした

桜の満開の時期も終わった5月17日（土）、季節が逆戻りしたような肌寒い一日でした。読書会には雨まじりの中、13名の会員の皆さんが参加されました。司会進行は竹原一孝さんに担当していただきました。

今回は八木義徳（やぎよしのり）の作品です。彼は明治44年（1911）に室蘭で生まれ、室蘭中学校時代に有島武郎の「生れ出づる悩み」などを読んで文学に目覚めたと言われています。その後、満州に渡り、入隊中の昭和19年（1944）に芥川賞を受賞しています。有島武郎の「生れ出づる悩み」は大正7年（1918）の出版ですが、モデルとなる画家・木田金次郎の「漁師を続けるか画家の道を志すか」の心の葛藤を描いた作品です。

戦後に復員して作家活動に入った八木は、昭和27年（1952）の室蘭市政30周年記念行事の「文化講演会」の講師として呼ばれたあと、岩内の木田金次郎を訪ねた作品がこの「漁夫画家」です。内容はルポルタージュ（探訪報告）そのもので、木田金次郎の飾らない普段の暮らしぶりをこの作品の中で書いています。

読后感想では、木田が生まれ故郷の岩内で、絵と向き合っていた姿勢や思いをどう読み取るかについて、会員のそれぞれの体験から自由に話題が提供されました。また、最後の岩内駅まで見送りに来た木田に「お目にかかれて幸せでした。これでサッパリしました」という文章がありますが、これをどう解釈するかで、話題が一層、盛り上がりました。

八木義徳の作品は平易な文章で読みやすいが、この作品だけで彼の文学を語れないので、今年はこのほか、いくつかの作品を読んでみようということになりました。7月26日（土）の「文学散歩」で室蘭を訪れますので、「港の文学館」で彼の生原稿にもお目にかかれそうです。

## 6月の読書会は宮尾登美子の作品です

次回、6月21日（土）13:30：白樺コミセンでの読書会は、宮尾登美子の「鬼龍院花子の生涯」（文春文庫617円）です。文庫本はすでにお手元にお届けしてあります。宮尾登美子は大正15年（1926）高知市生まれで、直木賞他多数の文学賞を受賞している作家です。伊達市に「宮尾登美子文学記念館」があり、7月26日（土）の「文学散歩」（バスツアー）で伊達市、室蘭市を訪問することから、6月の読書会で取り上げることにしました。お楽しみに。

今年の5回目となる「文学散歩」のご案内は、次回6月の読書会でお知らせできると思います。多数の皆さんの参加をお待ち申し上げます。

# 当別文芸の会だより NO,51

H26・6/27 発行 (連絡先・河地良一 TEL090-5076-2550)

## 6月の読書会は宮尾登美子の「鬼龍院花子の生涯」でした

6月に入って2週間も続いた長雨、この間の降水量は例年の数倍と報道されています。好天が待ち遠しい6月21日(土)の読書会には、14名の会員の皆さんが参加されました。司会は村木一枝さんに担当していただきました。

今回は7月の「文学散歩」の事前学習を兼ねて、宮尾登美子の作品を取り上げました。宮尾登美子は四国・高知市の生まれですが、胆振管内の伊達市で「宮尾版・平家物語」を執筆しています。直木賞他多数の文学賞を受賞している作家ですが、長編が多く、今回の読書会では文庫本から「鬼龍院花子の生涯」(文春文庫・600円)を選んでみました。

会員の中には宮尾登美子の作品が好きで、代表作はほとんど読んだというメンバーの方もいましたが、大方は今回が初めてのようです。

この作品は、大正から昭和にかけて、故郷・土佐高知の町に男稼業の渡世を生きた鬼龍院政五郎の生涯と、彼を取り巻く養女の松恵、娘花子たちの愛憎入り乱れた人生模様を描いています。

会員の読後感想は、渡世の裏街道を見せつけられたような感じで、あまり明るい気分にはなれませんでした。時代に翻弄され、運命に翻弄された生き方に、思いはそれぞれ複雑でした。宮尾登美子の文章表現には引きつけられるものがあり、自分の生き立ちをベースにして何を表現したいのかを「他の作品で読んでみたいね」というのが大方の読後感のようでした。

## 7月26日(土)の「文学散歩」は、伊達・室蘭です

道南の伊達・室蘭の文学風土を訪ねる「当別文芸の会」第5回目の「文学散歩」は、町民のみなさんにも呼びかけ、大型バスで30人以上の参加を目標にしています。ぜひ、お誘い合わせの上、ご参加をお待ちしています。

当日、JR石狩当別駅南口を8:00に出発。途中から高速で伊達市に向かいます。伊達では「宮尾登美子文学記念館」「伊達市開拓記念館」を見学。ホテルで昼食。午後の室蘭市へは「白鳥大橋」を通り「室蘭市・港の文学館」、そして「地球岬展望台」にも行きます。

当別には17:30ころ帰着の予定です。

参加費は4,000円(バス代2,500円、見学料他300円、昼食代1,200円込)です。申込みは7月18日まで、河地(Tel090-5076-2550)又は堀江(Tel090-2054-7457)宛にお願いいたします。

## 8月の読書会は再び八木義徳の作品「脱獄者」です

次回、8月23日(土)13:30：白樺コミセンでの読書会は、札幌・苗穂刑務所の白鳥死

# 当別文芸の会だより NO.52

H26・8/3 発行（連絡先・河地良一 TEL090-5076-2550）

## 7月26日（土）の「文学散歩」は伊達・室蘭でした

道南の伊達・室蘭の文学風土を訪ねる「当別文芸の会」主催の第5回「文学散歩」には、38名（会員14名、町民他24名）の皆さんが参加してくださいました。

夏本番を迎える季節ですが、当日は曇り空で、時折、雨混じりの天候となりましたが、下段モータースの大型バス（55人乗り）で、ゆったりと車窓からの眺めを楽しみながら、快適なバスの旅となりました。

行きは江別西インターから高速で伊達までの道中、ミニガイドを3人の方をお願いしました。村木一枝さん（白樺町在住）には「宮尾登美子の世界」について、東前寛治さん（スウェーデンヒルズ在住）には「伊達市の開拓の歴史」について、続いて「当別文芸」（第4号）の紹介を兼ねて、佐藤孝さん（スウェーデンヒルズ在住）には「そば認識」について、それぞれ楽しい解説を聞くことができました。

伊達市では「歴史の杜」を会場にして「武者まつり」が開催されており、その中にある「宮尾登美子文学記念館」や「伊達市開拓記念館」の見学と合わせて、伊達市の賑わいを垣間見ることができました。参加された皆さんは、宮尾登美子の生き方、作品の紹介に心惹かれるものがあり、また、明治維新後の伊達市の開拓に、当別を重ねて思いを新たにしていたようです。

昼食は近くの「ホテルロイヤル」で取り、午後は国道36号線で室蘭市へ。途中、竹原一孝さん（白樺町在住）に「室蘭市のミニガイド」をお願いし、白鳥大橋を通り「室蘭市港の文学館」へ向かいました。室蘭市は八木義徳ほか2名の芥川賞作家を輩出しており、文学への市民の関心も高く、「港の文学館」の展示なども、皆さん興味深く見学していたようです。その後、「地球岬」に向かいましたが、曇り空でしたので、海が一望できず、水平線が丸く見える景観には出会えませんでした。

室蘭からの帰路は高速で恵庭インターを降り、恵庭の道の駅「花ロードえにわ」で休憩を取り、当別まで。バスの中では今日の感想をいただきましたが、歌も飛び出し、和気あいあいの中の「文学散歩」の一日となりました。また、「来年はどこに？」などの声もありましたので、皆さんの希望などもお待ちしております。日程も無事終えることができ、参加された皆さんに心からお礼申し上げます。

## 8月の読書会は八木義徳の作品「脱獄者」です

次回、8月23日（土）13:30白樺コミセンでの読書会は、「文学散歩」で室蘭を訪れた関連から、八木義徳の「脱獄者」で、札幌・苗穂刑務所の白鳥死刑囚を取り上げた作品です。資料は6月にお渡ししてありますのでご確認ください。

\*長期予報の冷夏が、このところ一変して「真夏日」ですね。国内外の政治・外交も混迷しています。そこで、暑気払いに川柳で一句「政局も夏のくらしも乱気流」

# 当別文芸の会だより NO.53

H26・8/25 発行 (連絡先・河地良一 TEL090-5076-2550)

## 8月の読書会は八木義徳の作品「脱獄者」でした

今年の夏も集中豪雨で被害が続出している地域があり、天の怒りかなと思うこの頃です。お盆も終わり、これから少しずつ秋に向かっていく季節なのでしょう。8月23日(土)の読書会には、13名の皆さんが参加されました。

読書会に先立って、会員の新名正勝さんが9月3日に、昨年に引き続き中国に肉牛の技術指導に家族同伴で行かれるとのことで、昨年の「内モンゴル自治区での生活」のようすをパワーポイントを使ってスライドを見ながら紹介してくださいました。

地方都市でも人口三百万を超える人口、肉牛何千頭も抱える牧場・牛舎のようす、そこで働く企業の従業員の暮らしなど、国によって様々な生活があることに、参加された皆さんは興味深々で聴いていました。新名さんの「内モンゴル通信」を、また楽しみにしております。

続いて、堀江三千代さんの司会進行で、八木義徳の短編「脱獄者」の感想交流です。死刑囚・白鳥由栄の四度の脱獄に至る詳細を記述した内容は、その執念、看守の目を逃れての周到な準備、やもりのような脱走術、そのどれを取っても超人としか言いようの無い内容に皆さんもびっくり。

八木義徳の生い立ちに重ねて何か共感するところがあるのか、八木義徳の文学とは何かなど、興味の尽きない話題で、余韻を残して読書会を終えました。

## 「当別文芸の会・夏の集い」を開催

この後、1600から園生55・パークレジデンス(4F屋上)で、樽生ビール、ジンギスカンを囲んでの「夏の集い」には、会員他14名の皆さんが参加してくださいました。

この日は昨夜から朝までは大雨、午前中はぐずついた天候でしたが、午後からはさわやかな夏日に恵まれました。竹原一孝さん、大口弘美さんの事前の準備もあって、全員での集い会場設営もスムーズに。集いの後半は民謡、詩吟、懐かしい歌なども飛び出し、ゲームにも爆笑。読書会とは違った仲間の楽しい集いになりました。この英気を糧にして、また、活動を盛り上げていきましょう。

## 9月の読書会案内

次回、9月20日(土)13:30、白樺コミセンでの読書会は、池澤夏樹の作品「スティル・ライフ」を取り上げます。池澤夏樹は昭和20年(1945年)帯広生まれで、昭和62年(1987年)にこの作品で芥川賞を受賞しています。

また、今年から「北海道立文学館」の館長に就任したことから、池澤作品を取り上げてみては、ということになりました。「スティルライフ」とは、静物画とか、静かな・平穏なとか、淡々とした雰囲気という意味のようですが、はたして内容は・・・

# 当別文芸の会だより NO,54

H26・9/23発行(連絡先・河地良一 TEL090-5076-2550)

## 9月の読書会は池澤夏樹の作品「スティル・ライフ」でした

9月に入って北海道も集中豪雨の被害や、札幌近郊も雨の多い日が続いていましたが、9月20日(土)は久しぶりの快晴。初秋の季節を迎え、皆さん、予定なども重なったのか、読書会の参加者は7名でした。

今回は帯広生まれの作家・池澤夏樹さんが北海道文学館の館長に就任されたことから、彼の昭和62年(1987)の芥川賞受賞作品「スティル・ライフ」を取り上げました。

読書会の司会進行は堀江三千代さんに担当していただき、先にお渡ししてあった中公文庫(514円)の読後感想を(もう一つの作品「ヤー・チャイカ」も合わせて)皆さん自由に交流し合いました。

大方の感想は「何だこの作品は?」「内容がつかめない・・・」など、あまり賛同の声は聞かれませんでした。感想交流を進めていく中で、「私たちが彼の作品に近づこうとしていないんでない」という意見なども出ました。

作品の「スティル・ライフ」とは、水彩画のような、淡々とした、平穏な、という意味があるようですが、読んでみると「文体が短い(読みやすい)」「文章で遊んでいる」「違う世界が同時進行」「宇宙的な発想」といったような特色が読み取れます。

当時の芥川賞選考委員の意見に、賞賛の声もあるところをみると、現代的な、あるいは若者的な発想を先取りした作品といえるのかもしれませんが。

指定読書でなかったら読まなかったという意見も多くありましたが、この「当別文芸の会」は「読書の偏食を無くする」という感想をいただいたこともあったことから、参加された皆さんが作品の感想交流を通して、多様な見方、考え方に触れる機会となったようで、帰りがけの皆さんの笑顔に安堵いたしました。

## 10月は当別文芸の会5周年「公開・文芸セミナー」です

早いもので「当別文芸の会」も発足5周年になりました。今回は例年と少し趣を変えて、自前で「公開・文芸セミナー」を企画しました。日時は10月25日(土)13:30~15:50 会場は白樺コミセンです。

第1部 提言「人生の言葉探し」—先人に学ぶ生きる指針— 13:40~14:40

提言者 当会代表 河地良一

第2部 文芸交流(パネルディスカッション)

「くらしの中のエッセンス」—好きな言葉・残したい言葉—

パネリスト 河地良一・大澤 勉(当会副代表)

司会進行 竹原一幸(当会副代表) 14:50~15:20

フリーディスカッション 15:20~15:50

町民のみなさんもどうぞ(参加費・無料) 直接、会場に13:20までにお出でください。



# 当別文芸の会だより NO.55

H26・10/28発行 (連絡先・河地良一 TEL090-5076-2550)

## 10月の「公開・文芸セミナー」は延期しました

10月25日(土)の当別文芸の会5周年「公開・文芸セミナー」は、代表の河地が「人生の言葉探し—先人に学ぶ生きる指針—と題して提言する予定でしたが、10月上旬に2週間の検査入院となり、先週、元気で退院しましたが、幹事のみなさんと相談し、今回のプログラムは、とりあえず延期させていただくことにしました。

立ちくらみがあり、普段と違う状況なので、専門医に診断してもらったところ、年齢的に血管も少しずつ劣化し、血栓が出来やすい体になっているとのことで、イエローマークが出されました。そう言えば、不摂生のかぎりをつくしている毎日でしたので、今後は血栓が出来にくい薬を服用しながら、あまり無茶しない生活や、食生活などの指導を受け、しばらくは経過を見るとのことのようです。まあ、大難か小難で済んだということでしょうか。みなさんには大変ご迷惑をおかけしました。お詫び申し上げます。

## 「公開・文芸セミナー」に変えて「文芸交流会」を実施

秋が深まるのを実感する今日この頃ですが、25日は秋日和に恵まれ、12名の皆さんが参加されました。予定を変更し、「文芸交流会」として、これまでの「当別文芸の会の活動について」の意見交換を自由にさせていただきました。

資料提供は、副代表の竹原一孝さん、事務局長の堀江三千代が担当しました。以下、その概要です。

- (1) 文芸誌「当別文芸」(創刊号～4号)について  
門戸を開いた文芸誌なのか、それとも同人誌なのか  
ページ数、値段、発行部数を今後どうするか 広告、協賛なども  
短歌、俳句、川柳なども入れては いずれにしても、メンバーの協力が
  - (2) 文学散歩、例会(読書会)などについて  
道内・日帰りで実施がよいか 宿泊の希望もあるが  
指定図書を選定、要望の集約、長編の扱いなど
- \*これらについては、今後、幹事会で検討していただきます。

## 11月の例会(読書会)の案内

11月15日(土)13:30～白樺コミセンでの読書会は、辻村もと子の「馬追(まおい)原野」(現在の長沼町)です。作者は明治39年(1906)岩見沢市志分に生まれ、昭和17年(1942)に、父の若き日の開拓の辛酸を描いた長編がこの作品です。

この「馬追原野」は昭和19年(1944)に第一回樋口一葉賞を受賞しています。第1章から第6章まで(112ページ)ありますが、北海道の開拓のようすがわかる内容です。ぜひ、目を通していただければ幸いです。 向寒の季節、風邪を召さぬよう。

# 当別文芸の会だより NO.56

H26・11/25 発行 (連絡先・河地良一 TEL090-5076-2550)

## 11月の読書会は辻村もと子の「馬追原野」でした

11月15日(土)の読書会は、前日の初雪が少し残る寒い一日でしたが、10名のみなさんが参加されました。5年目の「当別文芸の会」の活動も年度の後半に入りましたので、今後の活動予定のお知らせのあと、堀江三千代さんの司会進行で読書会を始めました。

今回の作品は、文庫本に換算して240ページぐらいの分量でしたので、時間が無く、当日、最後まで読み終えられなかった方も結構おられました。内容に魅かれて一気に読んだという方もおられました。辻村もと子は岩見沢市志分の生まれで、作品の「馬追原野」は、現在の長沼町が舞台で、明治24年(1891)に父が入植した当時のようすや、国や道庁の開拓政策、地主と小作人の関係など、当時の北海道の開拓がどのように進められ、また、その開拓にあたった人たちがどんな苦労を重ねて、今日まで引き継がれてきたかということがよく分かる内容で、みなさんには好評のようでした。

感想交流では、文体がきびきびしている、自然の情景の描写がよい、北海道開拓の歴史がよく分かるなどのほか、開拓の理想だけで北海道に来れたのか、登場人物の描き方はどうかなど、話題も多く結構盛り上がりしました。また、辻村もと子の39歳までの生涯について、進学や結婚、病気や執筆活動など、どんな生き方をしたのかも話題になりました。

「馬追原野」は昭和19年(1944)に第一回樋口一葉賞を受賞していますが、作家の辻村もと子については、あまり知られていない一面もあり、「この作品を取り上げてよかったね」というのが、大方の感想でした。

## 12月の例会(読書会)のご案内

12月13日(土)13:30~白樺コミセンでの読書会は、船山馨の「私の絵本」一煤(すす)けた門標の話一・「薄野心中」の短編2作品で、どちらも札幌が舞台です。船山馨は大正3年(1914)札幌生まれで、戦中・戦後に活躍した作家で、代表作には小説新潮賞(昭和42)の「石狩平野」や「お登勢」があります。資料はこの「当別文芸の会だより」NO.56と一緒に届けたいします。

## 文芸誌「当別文芸」(第5号)の原稿募集 !!

同人(メンバー)のみなさんのご協力で、「当別文芸」(第4号)の頒布目標も、もう少しのところ。また、年明けからは、第5号の発行にむけて編集が始まります。原稿募集のお知らせを、このたよりと一緒に同封しましたので、町民のみなさんへのPRと合わせて、よろしく願いいたします。

ここで世相を川柳で・・・「絵に描いた アベノミクスで 風邪をひく」  
「大義なし 見え見え選挙 笑っちゃう」という師走になるんでしょうか。

# 当別文芸の会だより NO.57

H26・12/18 発行 (連絡先・河地良一 Tel090-5076-2550)

## 12月の読書会は船山馨の短編2作品でした

12月13日(土)の読書会は、1週間ほど続いた大雪の後でしたが、11名のみなさんが参加されました。今回は竹原一孝さんの司会進行で、大正3年(1914)札幌生まれの作家で、戦中・戦後に活躍した船山馨の初期の作品である「私の絵本」一煤(すす)けた門標の話一と、「薄野心中」の二つの短編の読書感想交流でした。

最初の「私の絵本」は作者の20代前半の作品で、戦前(昭和)の札幌の街並みなどの情景描写などは分かりやすい面もありますが、ストーリーには少し物足りなさを感じるといのが大方の感想のようでした。サブタイトルの「煤けた門標の話」が主題のようで、標題の「私の絵本」の意味がよくつかめなかったからかも知れません。

続いて「薄野心中」は、明治4年頃の札幌の薄野が遊郭として開拓の一面を支えていた頃の話です。薩長閥の開拓使が日幕府についた人たちをいかに冷酷にあつかったということが、この作品からはよく読み取れます。この時代に生きていたら、筋を通すか、時流に乗って生きるかは難しい選択です。話は発展して、県民意識の違いなども話題になりました。船山馨の代表作に「石狩平野」や「お登勢」などがありますが、機会があれば、ぜひ読んでみたいものですね。

## 1月は「文芸誌交流会」です

1月24日(土)の例会は、「文芸誌交流会」という名称で、会員以外の「当別文芸」(第4号)寄稿者にもご案内して、会員と一堂に会して気軽に交流できる機会にしたいと考えております。ご案内の内容は、別刷りで12月の例会時にお話ししましたが、当日参加できなかった会員の方には、この「たより」と一緒に同封いたしました。

会場は総会と同じように「田西会館」、時間は11:00~13:30、昼食・コーヒー付で会費は1,500円です。1/15まで河地又は堀江宛てに参加の有無をよろしく願いいたします。

## 2月の読書会は浅田次郎の作品です

2月21日(土)13:30~白樺コミセンでの読書会は、浅田次郎の「鉄道員」(ぽっぽや)・集英社文庫(519円)を取り上げます。文庫本は短編8作品が載っていますが、「鉄道員」は最初の40ページです。読書感想交流はこの作品だけですが、時間に余裕ができた会員は、あとの7作品も読んでいただいて感想を述べていただければ幸いです。

## 3月は「公開・文芸セミナー」です

3月14日(土)13:30~白樺コミセンでの「公開・文芸セミナー」は10月の予定変更になった内容で行います。2014年の暦もあとわずか。みなさん、よいお年を・・・